5
4334
3

ヒへ5
4334
4

晋子一世の辛白ハこゝを五元ま
はくせりといへども奥にある自画
賛言の句をもあるハ一冊百篇ハ
破吟みハ梅巷の暁振居の昏うつ
うも芭蕉をもてもやしてもれるをくく
ハこれをもてもやして第ひあ物
ゆゆしめ吾為この青穢とよふを
こゝろうれあやしくさうれあて
編てまゝ一書とおとのく

五元集拾遺

春之部

日の春をさすかに落れ安永
年之やゆ歌中の礼を早月和
松うゝ伊勢ゝ家ゝ人ゝ雖
神明町小五とし兵衛
行合ハ松もうゝきかさゝ弁
清ゝ川ゝ賣ゝ也日ハ新ゝ川ゝ
落ゝ月ゝ新ゝ年ゝ歌ゝ興ゝ生ゝ手ゝ

元日や月見ぬ人の橋の春
ちゞのうや南時行東四天王
元日は炭うり十の指足し

手握蘭口含鶏舌

ゆきうり梅やはふかくうゝ筆ぬめ
師走の野(サヽ)ちうやまれおれ
うゝ行れ江の松をたゝ万
紫のふのあをしふしをしよう
新うまうまうまく連歌中行ふ春の
新春松枝紫百向ふ梅もし

法華ふとうとうとうとうとうとうとうとうとう
なうとうとうとうとうとうとうとうとうとう

蓬莱の松すくなくてうゝ根は松
延寿竜牛も雑煮祝ふうゝ
頭黄金
月ふ見ぬ一万歩を供の者
うゝ水うゝ鰹のかゞ結構さよ
春五正月老
生死のむゝ男うゝ寝
明うゝ秋のうゝ月うゝ匠場君

初夏や額中あつ扇ふる
世の中乃栄耀も皇とわけぬ
寿文の四判色紙文字丸間

蓬莱の讃

鳴てよる三の書院ぬかやで
福禄寿の讃

老こそ日や年ぬかゝら乃新法師

宝引の讃

保昌ゝちゝ引ゝ胴ふゝ

松ゝゝやまいきくゝ海ゝ
ゝゝゝかゝ岩よ尾上の春ゝ
ゝゝぬゝゝゝゝゝ

若菜

傘ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
菜ゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

大根の画讃

兵乃ゝゝゝゝゝゝゝゝ

表紙須紙ノ表帳の二枚目

白氏文集六帖のかきてよかりしとや

梅　梅　梅

寺枝ハ曲りくねりなやなるの梅

藤之丞ノ人子

吉ハ梅ハ入色よかるべき第

白玉ハ改名　詞出ちくあり

白玉の角ハ傳子やむめと星

梅ハ小さくとき白帳とり

白ハ白玉ちくとてくす惜へ

小袖ハ体白くむ免り書

宮の梅ハ根いきあり書つし

芭蕉翁百ヶ日懐旧

雲の梅まやむしのむし沈

羽書略

三日月ハ命あやかし国の梅

詞書有今略

焼のこ部ハ恨の柳りか

曲まつ曲まかくめ柳沈

あらんす百姓の掛物自画讃

[illegible]

山東上京

貫さしもわかく軒き柳哉

傾城の讃

きぬ柳此額の梯や三ケの月

鶯

鶯の出刀かな新しけし

うぐひすの暁をしらせすす

鶯の初音おこせ垂龍

うぐひすや竜ちり竹園のい酒

あらし[illegible]

鶯のなき子ありけり三太郎

[illegible]富士をたゝかふ[illegible]肥ら

扶桑[illegible]角を見する[illegible]向ふ

[illegible]ふ筋さま見よ雪の[illegible]

六角の京

近藤京 京所此猫かすひけり場屋丁

宇兵京 [illegible]をのくの猿やまゝ兵

幼京 [illegible]の百目あき子ふ別[illegible]

宇寺京 柏木乃柳を[illegible]あり猫

思他意 飯くふて君の方へと祈 松鶴

疑意 花の変胡蝶となり似より辰衣

人にことはりの粉をかりけり 廷

年山川面白さめぬあへまれ 吸喜

吉京の初午

初午や賽銭よみは芝居ゟ

初午に年の始の例とて

の清子連に祝儀てさしは

いの字より習ひそめてや稲荷山

山の端て乙鳥をくすへ入日かな

川漁編さます非人とも見捨ゝ衣

帰る房茶清さも友やおもふ

授記品無有魔事

くもりしにふりて彼岸の夕日新

不生不滅此心を

海棠の餅を添え縁

伶人此門もつしや春の声

世の中も何をさかしき雛子此声

惜春

梅ちるや一形を笠にせん風津

[illegible]

支考の主廷の[illegible]

白川の関[illegible]

白魚雪令

月[illegible]生雪（イワヘデ）奥地臘闇

白魚の[illegible]川けし

画讃

浦潟の[illegible]の[illegible]

引[illegible]

駒[illegible]

[illegible]

沉亀の脱[illegible]

[illegible]

東潮[illegible]

出[illegible]

[illegible]入や

鶏合

炭喰の[illegible]

毛衣[illegible]服[illegible]

刻[illegible]入る[illegible]冠[illegible]

老ふたりやうなる国本尺
拾貝をひろふ関の清ちかの
汐干
貝(バイ)ばかりや白洲の事は流れ松
貝をむき作るを
あさり貝むしりの紙ふくさひぬ
為潟や塩釜ふよす松ふくさ貝
子宮貝二見の浦を産湯かな
浜蛭ふりまつ嬴螺(カラ)ひかくさ
魚ふくりやうさ上げしはくさ栗

海松ふくさや浪のうちかくる貝
すくさ貝立ち貝立ち言濱見しへ人の
りまくさ中花ちすめります貝
江潟や上見松ふくり汐干貝
雛
かつくさの神をうまを松雛
いくさもくさ
世をふまふ屋うり人姫の雛
上ち貝ひ雛のすくさ松新あり
紙雛の人ちくさよ立すり

蚊

猿の蓑ふかぬ先に撮るかな
さくら狩ふい目玉のさくとせし
口ひろを奥へ吸ふく撮ト
こまをくるくるとせし新も撮ル
京中へ炊きのさくらや花盛
蛍田の寺宝
山撮ル を泣くこの稚子うか
墨深ル 鯛彼さくらかりうこちん

山撮流 こひしき俤あるうん
浦人の 蚊をとらふとて
数時を決ル 米買む傍さく
玄元の車 子供や名ま撮
法三ケ寺 此法ル奴の眠る画
落ふる此 物さむし 山さく
蚊ひろう 枝ル出 乳の毛ル
大佛膝 うつむく車 蚊乃宝
法坊やく 寺のうけて寺法
法利 行くいるうやや蚊出へ

庚午の雨とて降りて
汁腐をくゝ処さるる事えうあ
讀莊子
彼岸の嵐雪の俳諧のうを
花もうつるとあり春雨
かんさいやちりぬる花はなをもも
雨下けてくやりよう知らず事家
神力品 現大神力
法の雨ちらやうを花をさくあ
憶芭蕉翁

月見やう浅草の寺社弾くあ
代 蕉
鄙の笛絃義なよ時せん浮世ホ
屋形ふ舟屋女中およろ
湖春をいくゝ
法ゝよむ経冊をあり花び爰
ゝ山ゝ作ダテ京文帝花さめ
樓 鳥
花見やう天女頁ゝ歩浅
寒食二句

[illegible]や富士の峰を仰ぎ
[illegible]する[illegible]の[illegible]自画

画讃

蓑の[illegible]
山吹い[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]の子の名を[illegible]て
[illegible]
[illegible]

[illegible]のさゝら三八[illegible]
何必逃杯走似雲 [illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

蓑之弗

宇耳已

白兎もおとをきいてこゑもうく
はなれ山もしまのトもやうく
ぬぎ〳〵やゝ千々敷高衣うく

東叡山院

俤正のまゝきひとゝ中ゝ机
七日ふゝたる澤瀉理敷ぬ書簾

時分

なくこゑ二声めゝ出馬ぞ
あれ聚りて鶯ゝ初こゑ

高を守る秋寺ゝ鬼ゝ子敷

山田市之丞

ちりゝと雨ゝはゝゝや郭公
敷高て耳をけゝもて初こゑ
高白くしゝゝ我を帰ゝの杜宮
泣ゝ警彼附る牡の戸ゝ
あゝと鶯ゝゝて行
ほゝゝ来ゝ夜降のゝゝやうく
ぬゝゝゝ行ゝて一声を
郭公中入ゝのゝ行こう郭

さもこそ木葉ちりしき雪ふかく
鶯なくうこだの奥をほのぼのとあれ
ぬ戸や犬ほえ地蔵を信者哉
はるゝまき雪も掃ふあるる浦素
鰒
あぢきなき貝のとぢめ
こゝ称の地名ふらんしる鰒汁
書鰒は此卵(カイコ)の中此名ちり汁
人のとぢめし

人のまちとすりあはしを鰒汁
木賀
名所を海をこゆまして鰒汁
丹波此所かのとのゝ中りの
条勤を
黒杜丹波やあるその大名毛
むらもの漂山を名ゆかしき
須広此山うし海ふ何とゝ人名
蟻(ヒキ)をふんて秋の名を惜り
淺地系の義士名をしるむ

たもたの法を引こかるる

伏見城の系図

杜々の女房のうしあり

伏城の墓山屋さしやかの石

けし此石朝結をの凋をうる

新り隆を風もるのまけけ蛙

苔子ふるふ所ちる所此須弥いる

上野寺

灌仏や墓をむく新樹云

紙金和かろしやうを文云仏

岩谷庵亭題送懶

みしの秋や帰へるる嶺の月

雑秋や朝日かりの紙金此声

あるくの別雲うく

内川や鳥此うを墨ふかく蛙

枇杷の墨やとまを角ぬき蟬

秋ふかを西ふげつもにて鳥麦

馬士部ふくうをうつある麦雀

麦ふかの月しふ月をうんをの秋

雑化堂麦清く傍を氣を引

雲の麦藁よりなをまさるなり

豊年

如味噌ふかをを漬うむ仏芽子
干瓜やたしろびしてもうまさよ

祝産育

たうふかの皮に脇の紙つみ
大所亭法言 何去昭
はの吉兆筍美四もかうまるる
ちまちまるる法師の梅干けるを

梅いうう角仏の形変よむわを
壬二集
さうさうはとわ月うあまを
名をうへていうふひよるをを
とかをを

さみうをの名もんせよ変なる
なよ乗此未紫のうして紙の号
かをと立身をえて
ものの此此懐甲や庫のうち
粽うのん驛平とめて冷此の
懐須沖小冬束つ帳りに毋

懐之出者の蓋やこの杜舟

画讃

粽屯ふたゝみや芦の葉包磐

こゝろ元ぬゝ引ゝ分ゝ

根分や市地ゝ紅さす蓋

興文

けさゝんとのめや昔の冨田酒

千山亭新宅雪舟の絵よ

隅よ葉ゝを巻ゝて初ゝ六月雨

さみゝとよやゝし吉野を出る

三味線や蕗長ふ(マキ)ゝむ六月雨

意もとかゝゝ色おゝ〜ゝつゝあ処

題江戸八景

住へくいすまい浜川の花雨五月

さゝゝゝとや湯の極乗山かけ月

五月雨やまゝのゝ花かゝ色谷

江の嶋

燕雨の窟雲仙一曲角へ行へ

何ゝ蓋ふすゝん明ゝむ六月雨園

傾廊

八ゝ湯やかりさかりまん院ゝ

旅人をわすれてゝ

乗板や関の立月ゆめゝゝ馬

腰越

篠すりゝゝ鬢髪を麦藁の有

自愧

扶あゝゝを母藁ゝゝ有

多鈴呼おまふ極月のつゝめ

和古詩

哭ゝを焼てゝゝ鈴を惹る釈迦林

ゝゝゝれ杜国例ゝゝゝ

ゝを鈴人ゝゝゝ少ゝゝ

むつまゝて鶯ゝゝ月つけ

ゝゝゝゝゝゝ

かもゝゝ

祖母ゝ名呼ゝゝゝゝゝ時

引ゝの濱

芦叶ゝ腰てゝゝゝゝ

芽川より義より仕出す貢より
宮原より
栗ヶ木より大ヶ生より上野より
竹の戸より
臺より宮地宮中かくし
ヶ乗や鍛冶つかる第根山
田植より茶屋すら角田川
会根より戸より田うへ小
ヶ乙女のよりもぬ新い朝より
拾穂より平苗穂より秋穂あぬ

會盟

交ヶのより交より芽料理
ヶ小ヶ芽ヶ拾小木の下小
篭前栽
庫宮士近宮の真をすけ伯
ヶ中ヶ中いさらけ新茅萱を
ヶ中ヶ庭お栽ヶ名ヶ名ヶ藤
小雨ヶ中ヶ中ヶ中ヶ中ヶ中ヶ
およりしヶ作る白小
海雲和布ヶ中ヶ蟹の鍋養ヶ角豆

望海觀遊

海松はもやゆふかぜの降るに松

濱倉はは濱出を

海雲ふくやはるる出みを登ふかぜ

止波浦にて

はるすと雲のまふくるはは汐

壹浦の橋船押渡りて付橋の

下に入

帆をとるる鯛のさはやぶるる

舟興

文ふかと写つはれいふの光う郷

朝日に古き名ふ名ふ名ふ名ふ郷

石はは枕ふ郷やあるはは墓

岩根ふす鮑に鰒あり走鰒

拾女ふ郷ふふふふふふふふふふ

藻はふふふやふふふふふふふふ

藻の花や海老釣す舳ふふふふ

蔭はは臺ふふふふふふふふふふ

岩ふふふふふふふふふふふふふ

建長寺無詩俗了人

多小詩おしまふ俗なり 蓑木立
谷木の思なかるるとともし留
年の年年月年の日年乃
附てけふ入る
雞馬場小入る 飛 いさ〻小
日徐碎〻けてうふ迷ちうう
故ふひう 姫史をかけ立う雞さよ
いつの向てか別ひうて友 月
言ふ入る月や志ほう出る富士の山
蓑の月 蛾を 蛾ふして 五百雨

市井 俳屋のつまさよ
出ひうて 蓑 おつ 音 蛾を小
夜 讀書
蛾を 井つや 松 〻 〻 蓑 なの 家
中の日 〻 蛾屋 ようう
秋 早 蛾 紙帳 小 風を入る 書
蛾 多 石 〻 〻 雲 いぬ 人 蛾
碎て志
音の蛾 〻 松を 〻 蛾 八 〻 〻 小
宗 出 の 句 を 〻 〻

橋は二つ三つ敷にせられ
むしろ白かぶせ寒さ除皮さ
敷もの火ふ　ダ敷白　樫
松賀秋航岩城鉄中　弟右千
住とやや少し〳〵
敷もの火小枝第ふ　図畫小
佛骨表
ふふふふ　蠟を打ふ韓退ス
射者中リ　奕者勝ツ
蠟手よりもまわる　蹴ち〳〵

世を忘れぬやまのくれ松

陸奥の川道迄

冨士形や細代に火もえぬの小屋
白雲ふるさとやふし日記
ちりぬるは又ふるさとのふし日記
影れのよ新木のもとやとる蕨
冰室山里葱は紫白し日ぬ艸

不奪二百姓一膏腴と文選の詞

百姓は土をゆる神や一杯酒

恨農

焼塩の背中にあつし四月哉
印形買や朝見し家を名乗
蓬やや猫は毛虫を見ぬ
蓬より明るや六月朝ぐもり
百姓の子は生れよりむき出
白雲を乞蓬てうり價小
三義と云ひるかるひのこの所を
ふる貧て俳諧は奇抜を知て
点数付きよりとりて去る西之雲
のもとを小ぬ交ぬやときち丸車の

林のうけ小屋をかりしめるあるじと
ものいふる者ありて雪をうるる
ものむなしき雪の奥小屋もしるる

あるるか数雨人実し麻蓬
一晶の雨の雫ふる
日蓮よ木ず蕗よ蜂の鳴く時を
室蜂小木言ふものく所ふる那
木戸寒をわたる
蜂を南中一日鳴く秋北寒
入湯の人木賀をとうしよ

蜂の声すらとあつき格子
縁子を障子を障紙の表帯にて点
小ぶるもりまた
飯椀をかけもさるる蜂の衣
視彼蜂の貧者小衣をめるを
祇園敵のかり屋を法を
板の栗ふと言ふ世月の中蜂
絆天王と法蜂不
里の子れ赤ものいふも敷ふ
義叔談

傘と懸蓮の花笠下懸る邨

詞書

秀一郎蓮了淺を色ろう

得正観音像

長小蓮勝手まする白ひし

東を法作い法師の事受た

つとめ〳〵とも屋山の文と書

さけうとも

如あ〳〵と言て事と白蓮社

法方の部さく〳〵ち地蓮了邨

蓮の花赤鐸と云て暑ひ

帳りけの桐干暑し星い北

冠里公伯中松山初入の時

川と暑や浦の苫屋北軸法

小女北常ふ〳〵まるあつさふ

信九市り持し茶屋下

朝比奈の茶屋へ入し暑ひ

宗弁のとく〳〵かすり文

ちりまるものやさしう是

大内ちしまりし侍る

生死松いろ志まむ汗拭ひ
死の海を汗のうゝ事や爰中人
山田院亭ゝ
汗濃さよ衣の肖縋北ゝ
多おゝむ一重織も浮世ゝ
何ゝ織綿綿ゝ紙の題
小所の談
腦ゝ休むゝ大ゝ
かゝのゝのゝすゝ
ゝ北松の風の松ゝ扇ゝ邦

ゝのゝ風陸日ゝ園扇ゝ
所見
扇ゝ家ゝ星ゝ川邊北源ゝ邦
谷分の文よ北のゝ色てゝ
風よゝゝゝゝゝ
ゝゝとゝ
犬山の海ゝ重ゝ源ゝ
多ゝ師ゝゝ風の松ゝ
源ゝ海源ゝ今ゝ海ゝ邦
ゝ年ゝ多ゝて北の事ゝ

代々より者共ゝ如ゝ久敷
布代貸の儀
痛くらをとゝも部屋多々涼
祇公日次の部とゝわるて
河美垣法利をひく濡れ
芝地の敷きとゝの書とゝて
新今ふ備よく痛くゝ下敷きゝ
久敷ゝよくゝて罪ふ生ゝ利
皆とゝ之の集ふ御の分
ゝ子貴子のゝ圖儀を
ゝゝ

抱ゝ童や妻ゝえゝゝふゝ
曲ゝの樽ふ濁水を四ゝ
漣や表をゝむしろ
ゝゝいゝゝ
ゝゝ祇やゝゝ麻部市
芝部や曉ゝ柄枝水
井ふゝふゝ物の無ゝ
波やゝ
新市より濁ゝ發ゝ
霧沾公能無

月にかけて酒のこほるゝ清水かな 思
たゞ水にうかむで清し酒まくと
おもふ人をおもふ人を偲ぶ
これ迄ハ松かけに下涼やし 家千
判者をよしいざって紙の花庭
をとし 以上
此海を一頭に刻く 氷子
世にあり泥て西行の死をかりけり 千
桂もむ友よ膽の 精 雪 清水
夕くれや清水寺は巴ある堂

負まくて夕ぐれ雲のあやまちぞ
烟雨村
夕ぐれや清水かゝる去娘
中そらやきぬふの坂とやまた 雖
雨中吟
白雨に秋塔の紫白
淺茅の露に埋めて清水まま
しくれを見れて
夕くれや雲ちぃさき牛の尿
中ぞらやかぬ房をかける 偲偲師

夕ゝゝや家と呼ゝて帰ゝ家鴨
八雲ふり山峻嶮をこの北岸
根挽のくすりやゝ雲の子

望相留

雲ゝゝ深金ゝゝ日ゝ照ゝ
ゝゝゝ嶺や掃風ふ似ゝゝ南平
板ゝゝと呼ゝあゝて見ゝ南
清の西戸むゝき蠣の崖ゝ郷

醉登二階

酒の滝布引茂の九天ゝ落ゝ
幻や泡やゝゝ北下のゝ
廣の面ゝ

すびつゝすゝふ茂の炭俵
陣家ゝ物をすゝ冠
先ゝを寄ゝとゝ
何ゝゝ六月相を植る人
市中の交ゝゝゝ
敢ゝゝゝ大敏や文神ふ

信枝
姥桜此所の名残なり

秋の部

井の柳こみふを桐此一葉かな
まれ晴一葉ふちりくおよき哉
　粛山子のことと見へ　画名探雪
なり琴と筆と大数と撰せし
出来しとしれ

古筆
けしき色桐の一葉や筆此声
竹床にまつりて信ひける
　信をとひて
手拭の筐よりこぼれ一葉の雨
春日野や風に桂此一葉川
　洞玄明へ
字や秋螢居を明まて七多羅樹
父の根にしきをくみ取くまとり
みまさふ以作りつき含子暗て

[illegible]

妙[illegible]感の[illegible]

秋[illegible]

梧枝亭[illegible]

乾や兌坎震離艮坤巽

[illegible]や秋[illegible]山[illegible]

[illegible]

秋夜話 [illegible]

雨[illegible]

市隅

西例[illegible]

[illegible]女[illegible]男[illegible]

市中の閑居

[illegible]

朝[illegible]

[illegible]

[illegible]

朝[illegible]

すきを畳るかけるの後
あさうのや藤ふ生ぶもし遠あるる
葉子子きよりの瓜此二七夕
郭公ふいりの若生し清使
乙人の妻ちの生く恨む槿垣

七夕

星合や人此心波瓜をしき
夏格や待とを宮殿の星姫
素堂ら毋七千七日の秋万
望の秋此七夕乃奏ら勧金

星此夜より紙代紙とく養をを
三遷のかくよ情ひてもつなく
ゐる嫁を寄へのもらしを一日
あるて寄ふ寄をなるけをい
ゆ行くるる

文月や素ちく多字も毋の恩
格買ひひりの涙や天の川
妻星よりあるよ一人をあるる女ら
大加此を明より天此川
明星や額ちを寄ふ翻ひく紙

秋七種

久方の空のかなたの人なれや女郎花

女郎花へのぐんたくして、紫苑よ

ちりうせぬ花を七夕の白竹

よせしくさ

露ぬきの川や味噌こし蛍ぶくろ

海辺暁雲

秋書や朝瞰しる方又

沐浴のつきをかなもすまと

てをたこしふるまるの結髪

髪のうちの杉子どうる氣に

七月十日の夜東湖の食徒よ

杉子のうちをとりひろ

髪をもりし骸骨かとる萩の声

河去あり墨す

萩もろ子菩薩ちく刀上意

又をちを萩の表ふあるこを

ちを花蕊 拾貝みんちりの郷

萩ふ荊を西瓜よりを借す男

半ふをふる姉帰髪をふ女郎花

遍照の後

俳句よ鶴の如くつゝみ女郎花
經無ものちる迷惑さを
菅の笠ふれ赤い紙をうつみぶ
幾ちらす男の推つゝ
うけふるゝ
西瓜吟ふ奴は髮は長
神仏ふ路を安達ヶ原や
沾徳餞別
長生むと人の若うと云ふ
ふるとやはの先手人舞

芭蕉葉も角をかくしけり
永日よりかけてなむる雨を角風の屋ふる
芋をうゝ雨を角風の屋ふる
鑑素堂カ秋池
凡秋北荷葉二葉をくゝり
芋冬もて去れ掃除や白芙蓉
盆會
かゝるふれなる魂のゝ郷
立ちもの俳句を句なり
・右の三句文わりをふ略す

陀羅尼品

涙を罷れば秤や墓まんれ

分郊原

みちくさや分涙ふるる髑髏

文月をとりもつ刺鉢を猟領

世の人れいひさとすと

鉢扣れかくても屋ろう大敷を

生霊酒のれ下りる親仁

なぶいかくまを入ふるあしふ

荷ひ分てれ労をいとふまれ

切るる筆ひを

新とと子もきもきまきんや蓮賣

桃絵や声の多りさを才子坊主

一生屋酒をおろしてたりふ

踊りくく変れを帝ふ酒さくろ

ちとくと名も優美なり角力元

霞

赤。院のけ戸さくろんを家をや

松ちくとまれ変や国乃糸

糸身やひくりハけき娘の子

子子爲小夜物語を物語りて
落花門に吐月峰や新豆腐
芭蕉庵の秋
墨屋を紙敷よ蘆の葉ずれ
旅の町書寄る犬の尾なし
長月よかるかるや懐紙の奥ふ
二度目とさすがしるる旅ふ
宮原の山ふ
川霧やあるとのけ城
雲夕烟り糸ひくすまれ浦

寂蓮
和歌浦骨(コツ)格ふり山のタ月
まつ海や淺黄ふなりて炉乃蓋
秋の心は法師ふ位の麻衣ふ
南紀の其詞ふ寄りて型
四れ玉川ふ西行上人の墨井
わすれと流りしふ
流る井を名ふ流りて秋れ雨
七月廿一日工部之画ふ
芳屋師をともあひて墓誌

俊竹誓願寺会佛堂

三人の声ふるくよ秋乃雪

宝

すまうふかむしすまし俊茅

梅よりなまし悼の書いけるくん

因さひてしかしかもみち

元禄六酉仲秋保川芭蕉庵

留主の戸よ入て

生絹とる雨雪ふるな生駒山

一しかの妻もるむ天保丁

給

笠ともおろして来るくの

めつらしきふ

蓑ふるり荷分北文や天保丁

豆腐湯豆腐

然の湯ゝ厚と沸るなる豆腐ふ

土竜生先祖の功ふ沸ゝ於とゝ

飛を枕席よやすんすす一歩義

湯よのるむ心さしるる古ゝ

みをおろうるむくくゝ食を

厚北ふる芋ふりけておつゝしき

河のうを弱しうをとてうをかを
をしい知りとて家物すり熊
眠をさましもせると
陣中の孤肺もなくやこの声
著北山をうを庶のすぐれ
わほうとい扉もアクうん呼子し
苅のアようをを繰ふへ小四の触
カシカはタ悲へい様の声を汚
さちほうをかを垂をすれ鶏り郭
いち性柔弱にしてもなし

潮をうをとてをよ死す鰯俗
字なりうをしと例すおもしと
いうし
小いうやこの一口茶子屋北の
かのうを朔飯白ふ根汚り郭
月
ぬるもも七分にあり青の月
鯛い死をを江戸おせをとてうの首
てり月をんよ九皇おおて月見式
すらなのをうもあるうを貴

月ふかく波よせてうら風ふく
・河出ちかく略
名月やくもなき年も兼ねかねまち
河出略
信濃ふじを光りあり月の月
仲麿の画讃
月うかやあをを帆ふかく三笠山
長柄文臺の紙
もろ月をむかしの橋に打月を
月を信濃に紙ふかく百姓下女

月やゆ信濃ふかくの月を感りて母に新
満百
河の月の月を感りて母に新
狼ふくく九き柱を月をうの郷
河ふくくく報ちちりけふの月
唐子に月信濃ふくく月の雪
嫁ふくく中出に月やゆき月新
・唐と榜を画く
中榜の月ふくくくふふ三日の月
月ふくくく詩の舟ふ山ふ川武ふ

信濃を呼び出して
少使を託して毒月をたづさへ
鄙めやる逸谷やりの駒迄
月日は栗の葉の蔭に隠れ
岡の木の間に椎いる里は松ぶるより
降る雨林や歯ぶるめる朝の雲
いう栗よ神ぶる猿のおもひ
深川義卿きて
栗賣の言葉へかる角おりの
癸酉八月十九日は盆六父葬

送の場にし崩心の哀を懐
て四生の起別をとる
一滴の水に悟りを敗る
明なるさとりさとるものを明るた
移る苏子小平を祈る人の夫の南
稲うるや穀を掘る蕪の中
松は尼の庭よりうつして屋よ松おもと
場をつくして屋よ松おもと
北まふとうるる中よ志めし
初雪ふりける

折ぞもて都の土やまた子持
松のかほと飯もおもり採茸
・東国風来る此山のきのこ
ある所
冷泉の珠枚手清ある茸こ

茸将十唱句

其表　不二班麕茸
らう　蕈凹交臼杵
其軸　茸蠟燭消串

石突　角仙屠角帯
つくり　笠回菌独楽
焼松茸　松枝菌返報
塩松茸　不香松雪漬
京女ハ一斤と号て　蕈女山雨重
其賞　北寛小松茸
献上の中つも　祝宮崎生茸

・菊
錦の下ちつきりし寄の菊

籬菊の中をたづねて国の菊
千代菊菊人〻此名字を此菊
柚の色やたちてうる菊の表

重陽

菊の酒菊酒うるふるさとみちの
千家の騒人百菊此俳諧
菊うりや菊よ詩人の質(カタギ)と賣
さくもみちるを金をぢけて流るゆく
月入るふるよりある殘らむむし菊

四月反風虎公十三回忌

菊此色やたづさよぐ色なる義さ
九月九日庵を拾ひ名と星ふ輝く礼ある
さくやの名と星ふ輝く礼ある
菜花餞別
友成を子易此使子撫子を
子蕎の柚乃梨よ此し自然
十三夜
白雪の義ゆく爾よ海皆
ゆきも故郷をうる彩よ
月の月松やさむう江戸此庵

はるこをとふてくやはなは
ちむしれ物を栗よりくさ
家ちりはまををしたの用

鳥

木兎やてんまうとりの
仁王堂の后山うやゝ紅ひ荒
山うゝ北戸よりも家もあり柏
寺院よりとく稲負ちと立ゝる者
小高る屋長寿
冥うゝ小枝の中山立平うゝ

中村少長まゝ婦連ゝ上
京やゝ付
山高もくをうやむ能廉
紅葉はゝ山をうんの去年ゝ
山ゝくうゝ面やゝ和もみも
新般六角港
ちはの屋のくめや下紅葉
氣のつゝ安やさゝゆゝ岩小苔
木葉(コハ)の食叢を秋(エビス)乃みさ部
苔ゝ秋

厂斎出京すとて宗房の書

九月尽

秋の夜松風形ばかり秋を聴雨

悲園非

傾城の小寄すがらし九月尽

みちのくの部

夢よりも風ぞ芝をもむ時雨

笠いなるも半ばさらし時雨

神明の社にまうでしに時雨

今然をたくさんに浪ありあるとき

園河の絵

京山を見ばいとくくしく

七日忌

七夕代参七回忌

ちりぬるやひとふしの時雨

しらやまの厠の一つ松

時雨痩松 私の初平ものせ

なもしこうさくをよひ生をうる

[illegible]を中にて[illegible]
[illegible]の[illegible]間を尋ねける[illegible]
[illegible]晉子義[illegible]八幡
[illegible]ふ[illegible]てのたまひとて

風　文[illegible]

木[illegible]と世よ捨[illegible]如[illegible]栗
風[illegible]ひ[illegible]世[illegible]年のうゝ[illegible]貝

芭蕉[illegible]

なき[illegible]を[illegible]や[illegible]
[illegible]い[illegible]山子にとる[illegible]

[illegible]
曲[illegible]年と幻住庵よりもひ[illegible]
[illegible]の[illegible]と[illegible]椎の味を
[illegible]や山の[illegible]
玄賓を世年[illegible]年[illegible]干菜賣

画讃

松一木[illegible]食の[illegible]

坊主[illegible]
坊[illegible]
坊主[illegible]

朝鮮の書やうらむ蜜人参
細代もて大根塩をとかせり
春ひさぎ海
福天の京机まるや仕切帳
子々衣装親い沈水香爽海
金玉のおのもとなる玉れ声
沼楽城れ火洞うわるる玉れの多
洞ふるるるるん剥りる玉れの声
貞徒新宅
武者を清昨もまるて板れ玉

玉炭刻る火番を斧の幽なり
切火やた蕊うけていちり 鏡
火燈のうるる菜梦よ志葉を机れ
角石の輝るる浮世よ砂り納菜
佑つるるるみれ移宮や納宮什
玉厩
多移の呈下をかるんるるとせめ
角寺れ紙子もむ失り世りり弓
朝歳馬の月るり頭中汁
玉玉るる極の死れ世日市

宿僧房

あるまじき所しの間仏の打坐より葉
ふ須へ一数をさゝぐ中柄う邪
武蔵坊や富士礼一数のうち不
城坊の筆墨をもて少抜衛
明子の者実教明石の梦を落
材よりるを礼教い主し虎う作

人の毒むつへきしよ

警れ警れ主とちようすこうう
作くと堕れ魔や多童王

主ま广忘や自利よさるるかを
教真
夜真引 論人犬や主川山
犬引て宝腐将内より星教真
茄一主ふや乞食礼ゆめ鳥
龍見世市川三郎を続す
ふ川ますやいなよて祈ゆ礼筋
夜学感
警祈る教や塔婆好墨より教を開
出家別付主し人のう月の

月小酒賣不許入内とな
さわりしを
家の縁とたゝき新樹
柳むらやまの見へ
町神一本左右のひとをうたと
貞徳翁五十年忌元禄十五
年壬午霜月十五日懐旧乃
節とをもふ橋のむしろ郷
霜月廿七為侯于黄門光国

郷之法系亭題周山之絵景
一 ひとの法系屋
田の寺山あるとおもふ
手北ニ破船法ハ冰茶屋
二 法水寺高
櫂精舎柳や千この高
六角堂孔子堂小町の石塔
三 耕作の法系屋

[illegible]

根[illegible]

四 黒木[illegible]

[illegible]

[illegible]

我や[illegible]

五 [illegible]相

[illegible]

[illegible]

六 西行[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

炭や岩間[illegible]

七 唐橋

[illegible]

出橋や[illegible]

八八さしの花れんげを取て
坊さま新月中も所より清川屋
九、河原書院さまを見て出る
[illegible]
八ふ代とを河原出版社法ようし
十西湖さまひいとの紙の印宣亭
より入らせ拾四を持むてりく
美よ毎毎ふ家にて西湖さまあ
ふとさまを東坂からうとを次て
詩をあらそ漁ひむ重九拾小松

右十 寺

茶北巡右炭の三人を完右多
松風や炉より富士を見て西屋形
俺よ絵て一炉の数茶乳清
鰹
妻からな飯なりみとお衣衣
鉄炮のさ形ちやかとけ
ようをかていよくみて鰹の西
詩人西さも松江此河豚といなな
鰹ふうす鰹千うの宣の鰹

文略す

茶代湯ふ為ときとなし鰹汁
鮮鰹を少うきけ月見豆腐(りゃう)ふ
茶代うやうひうかいた学鰹

豆

うの豆やたの面出す板れ垣
勝を掘ふきけふや　豆れ　積
混雑(ぐ)り多弗し水の豆

文略す

黒塚のまふとうとつて豆女

塚未のふしミ勝ふや豆皮
冨士の畑れかひやなうんふ
作製をよくうう前やし
豆ふ思ひ陸ふを付ふへきふ
とふく化を廣ふ板ふ豆て
陸ふのうみふへとといひて

祝ふわふふなり豆ふしの豆
豆ふ日い高ふ声沖　賣ふ紙ふ沖
冨士ふの寸ふ麦回ふ豆の早苗ふ
書陸を豆れ祝ふ九合ふ

なる高貴なる霊仏霊僧ハ
さ月雲より出小使を何如つて
拾出して雲うち拝ム稲袋
雲おもし浜軒の掛菜よみされる
秘蔵の鶯ぬれ声をおしめ
家人て
雲深よ佛手や雲うの紙
朝ぎうや月雲深き河の味
雲の間へたうも蘇浜の女郎
秋てあ〳〵昨夕の菊と麦畑

拾遺
さうえんよの遺稿もたゝし意盛
伊勢俗をうたをまことに秋和
詠たるの歌

鐘くの一声ホ
鐘くもすく
和ぎうつか
うみち詠セ
うたをや般戒
おもし浜軒や
藤うて

拾遺

世を捨て捨げし　世こしの人を
見れば　なりぬるなる
七十　古来　稀なると
やつこと　捨ころも
汚れかへて　捨てしき
あるなるの　捨てきやな
凍死鬼の　嘆や捨てき

漫　漫　成五倫

君臣有義

家の子孫を高ふ年忘

父子有親

舐犢や　捨てき　捨て
夫婦有別

泳ぐ　泳ぐ　泳めば　出ぬる　泳ぐ
長幼有序

待ち　待ち　狼の子　ちちよ
朋友有信

見ぬ　我　焼　よ　ち　ち　ち　ち
大小の　元禄十丁巳年

大庭を　志　く　く　東　邪　元

為よりてよりて坊主ふてて昭光参

弁町河の画讃

三尓幸ふや日を出さぬる鶴一丹

元日を祝ますやうなる長寿作

長寿山を左の耳よりとる和

居し胸よりとる

煙草や諸人ゝ寄る涙かな

京若名の明ける梅ふてて明ける

さきかんの年の四月廿六日

酒債尋常往処有人生七十古来稀

詩わきんと年を貪り好酒債(ナカテ)尓

流れ行くや子年住居の年の垢

年中の放下見へ物ともせ書

豆をうり河声ばかりなる笑ひ哉

乾元の名分

長き根ばかりなる近し得方丸

三年原稿煙媚ば自画讃

今こそ小国十帝や思ふ外

流れ行年ばかりあり世ふくもりくもりくもりき

年郷や只業年ば伊徒ひき

きせ紙公旅もそのとし是曽田乃
申しハ伊勢の志ゟへおとひのかげ
なりぬるを得ひて付の山より
くくまやきよ

三者捨よ笈の小文や年の暮
行すてし幻住庵よいつか自
をか孫さまりんそ是冬をしさて
世の中をうけあつ年

妖なりし瓶貧しき師走かな
大晦日福いのちから年を置
浮玄関より破戸弓をりえまて
誹ひふとなし不大破とし之堂
折もし見戸板めるたし錦の跡

折年の喰味も加かみとも

聖代
三陽都りて日よし寒く大晦日

雑之部

十牛の圖 画ハ略之
徃昔異邦の佛還禅師十
牛を寄して人間迷悟の品を
さへかさとより其書を相伝は
あって牛ハ声音牧有之又及
とも是をわけかハ訛なりしさ之

爰わ十及の家を画潰し給て
笑こと万世を強さとの晋其角

寿　牛

やとれ者はいとうて半月程に
呼　牛

よろこぶるあり是角てもさらぬ
侵　牛

芝れ者ハ稲ゐよ蛇乳の話り
貧　牛

仁象刺やとれ者ハ

光中

[illegible]さうとんのたる時分に

於冠里公各歌五首梅

梅

[illegible]梅や[illegible]の須へのうけちゞく

[illegible]のさき[illegible]ぬ[illegible]や梅の蕚

村雨[illegible]や[illegible]根の松

[illegible]丸蜂丸より宮をはく坐敷の

[illegible]いふ[illegible]

[illegible]より[illegible]御[illegible]口の[illegible]

一チいめ[illegible]の[illegible]

[illegible]い堀[illegible]

幸[illegible]わ[illegible]る[illegible]

城[illegible]字の[illegible]せよ

[illegible]て一町世[illegible]

子[illegible]む[illegible]る歌の[illegible]

[illegible]

盆舎

[illegible]

十日[illegible]

ひさしく会さつらしく人のと
とまりつるふくさすさとりに
すもすとりはよ

馬糞紙よさきにかきたるみを
あらはひしきりくるる神

我死て桃梅柳うすき酒
作のむらさきか花乃あけの

追加

おもずくやぬをぬよ浮蓋主
解脱つ国栖人ごまぬ参しとう

天智天皇

あかおさむ入唐の頃ふ日海波
美濃紙をし清水を嘆をかく書
孫金ちく

山城の額の海れあり さ郷
画須
解脱や弟ら月ふはよ聖山

妙法蓮華経

毎へ[illegible]や法の蓮花華経

雪荷亭の花ふまうく

舟を引る孫ちうう糸橋

自画讃

掉扇やさらぬ千変化体合

囲よう大工石ろうむ後の梅

九條飯沛下向

傳奏ろ[illegible]ハ見さやもれ門

沛飯場ふ馬休めうう大根引

沛所石[illegible]と大根引

後州久能の別荘さんさめ

かして沛色[illegible]

[illegible]さや沛年男の陰姿

旨延享四丁卯年秋八月全編校合

成

百萬旨原

續五元集　其角附合　全部三冊　出来

江都書肆　日本橋通二丁目
前川六左衛門梓